新潟医福誌 2 （1）46・54

［原著論文］

口頭伝承としての昔話想起
－ある瞽女の質的事例研究－

廣瀬 清人

キーワード： 想記、口頭伝承、昔話、瞽女、質的事例研究

Remembering Folktales As Oral Traditions : A Qualitative Single Case Study of A Goze

HIROSE Kiyoto, Ph. D.

Abstract

The article addressed to remember folktales as oral traditions. Very fortunately the latest female minstrel with blind eyes(goze) who could do appeared unexpectedly. A qualitative single case study was adopted in order to divulge the phenomena. Being interviewed exclusively 13 times, she remembered very precious 34 folktales.(Animal Tales 3, Ordinary Folktales 26 , and Jokes & Anecdotes 5) The characteristics of them were typically as follows:(1)Almost every folktale was told without faltering. (2)The content of them sometime conveyed the world of animism. (3)Each tone of her voices on the casts communicated the corresponding emotions in her folktale. (4)Ideophone, which was unorganized, but effusive and so lived, often appeared. (5)Gesture was hardly made. Simultaneously, as having reached the period of the latest minstrels, this study strongly indicated that their function of the transmission to the other persons have mostly disappeared. Nevertheless, it survived to the same minstrels scanty but surely.

Key words: Remembering, Oral Traditions, Folktales, Goze, Qualitative Single Case Study

I 要旨

本研究は口頭伝承としての昔話想起を検討するにあたり、最後の瞽女に対し、質的事例研究として13回の単独面接を重ねた。その結果、34の貴重な昔話が得られた。その内訳は、動物昔話３、本格昔話26、そして笑話5と、本格昔話が中心であった。昔話想起の特徴は以下の通りであった。(1)想起は驚くほどしっかりしていた。(2)内容は、植物や人間以外の動物が人間と等価の生命を持つ存在として、登場人物に生き生きと語りかけるアニミズムの世界が頻繁に表れていた。(3)声による感情表現は豊かであった。(4)擬態語は無秩序だが生き生きとしていた。(5)身振りはほとんど認められなかった。更に、最後の瞽女の時代には、瞽女は外部に向けての昔話の伝承機能を既にほとんど失っていたが、内向きには細々としかし確実に伝承を続けていた事実も明らかにされた。

II 目的

本研究は口頭伝承としての昔話想起を検討する。ここで極めて重要な課題は、昔話

新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 新潟市島見町1398番地
TEL : 025-257-4467 E-mail : hirose@nuhw.ac.jp

が口頭で伝承され、かつ日常生活において、文字伝達の経験が制限されている対象者を見いだすことである。予想通り、これは極めて困難であった。

非常に幸運にも、本研究では昔話を想起可能である、文字通り、最後の瞽女（以下、「媼」と表記）を見いだすことができた。しかしながら、この人物は後期高齢者層に属しており、今、この女性に昔話を想起してもらわなければ、取り返しのつかない損失を招くことは明らかであった。

ところで、これまでのところ、瞽女の昔話に関する先行研究は、国文学者岩瀬[1]による唯一つしか存在しない。従って、巷間で言われる「『瞽女は昔話の伝播者である(p19)。』という基礎的仮説に対しても、実は十分な証拠は得られてはいない。[2]」状況なのであった。

そのような中で、本研究は、長岡瞽女屋敷に属していた媼に対する質的事例研究の第一報に位置づけられる。この方法は、「個々のクライエントを『新しい』『ひとつの世界』として把握した場合において、その世界を適切に探索し、記述すること（p5）。[3]」を目指すもので、「従来の科学の枠組みにおける一般的な法則や傾向が明らかであることを前提として、それと異なる特異な例としての一例報告。[3]」を意味してはいない。

本研究では、その質的事例研究を実現するために、岩瀬[1]の先行研究を手がかりにしつつ、対象者に密着した面接を積み重ねることによって、媼の昔話想起をできるだけ適切に探索し、記述する。そして、「臨床の知[4]」の観点に立つ質的事例研究の第一報として、この女性の昔話想起に見られる「固有世界[4]」「身体的行為[4]」の二点を明らかにすることを主目的とする。

Ⅲ　方法

1　対象者

媼は1913年１月28日、北陸地方のＡ県Ｂ町に、男四人、女六人きょうだいの五女として生まれ、現在89歳である。実家の職業は農業であったが、公衆衛生が十分に整備されていない当時の状況の中で衛生的とは決して言えなかった生活環境、及び貧困に起因する栄養失調等が重なり、３歳の時に視覚障害を負った。これ以降、明暗の識別ができない絶対盲と呼ばれる重篤な水準の視覚障害者となった。このため初等教育は受けられなかった。

今日、媼は視覚障害に加え、高齢に起因する高度な難聴である。従って、面接の際の意思疎通にはワイヤレス・ガイド・システムマイク（Panasonic RD-560Z）を常時使用しなければならず、そのボリュームを最大値に設定しても、なお会話困難な場合が時々あった。医師の診断によれば、視覚、聴覚以外の心身状態は異常なしであった。

2　手続き

1) 面接期間及び場所

Ｘ年８月17日から（Ｘ＋１）年６月６日まで、月一回ないし二回のペースで、13回の面接を行った。

最初の３回の面接では、曜日を固定していなかった。これ以降は木曜日の午後１時30分から開始を原則とした。一回あたりの所要時間は概ね１時間30分前後であった。面接室の広さは400cm×570cmであった。その中央部分には大きさ76cm×145cmのテーブル１個と大人用椅子４個、また窓の下にはソファ２個が配置されていた。出入り口は２か所あるが、外部から入室できないようにバーで固くブロックされていた。

2) 面接方法

媼、面接者及び面接協力者の３人が参加し、そこでデータが得られた。主なデータ源はフィールド・ノート、デジタル・ビュ

ーカムの録画及びICレコーダの録音のトランスクリプトであった。デジタル・ビューカムはテーブルをはさんで媼と対照の位置に設置された。ICレコーダは媼から約50cm離れた場所に置かれた。面接者と面接協力者は、主に昔話の聴き手として参加した。

3) 教示

これまでに聞いた昔話のうちで、今回、思い出せる話がありましたら、お聞かせください。できるだけ思い出したままで、付け加えたり、省いたりしないで、お願いします。

「思い出せない。」と答えた場合がまれにあったが、その場合には面接者側が昔話の簡単な筋を提供して、想起をプロンプトした。その想起が終了した後に、誰から聞いたか、及びいつ頃聞いたのか等の周辺情報を確認した。

Ⅳ　結果

1　行動観察による精神状態及び日常生活動作能力評価

これらの機能をチェックするために、N式老年者用精神状態尺度（NMスケール）及びN式老年者用日常生活動作能力尺度（N-ADL）を用いた。それらの評価は、媼の日常行動を最も身近で観察している人物から得られた。

1) NMスケール

家事・身辺整理、会話、記銘・記憶、見当識はいずれも10点で、正常の範囲であった。関心・意欲交流のみ９点であった。合計得点は49点となり、総じて正常の範囲であった。

2) N-ADL

歩行・起坐は10点で、正常の範囲であった。着脱衣・入浴、摂食、排泄はいずれも９点で、境界の範囲であった。生活圏はその範囲が限られているため、その他の日常生活を考慮すれば、７点から９点の間と推定されるとの回答を得た。NMスケールの評価と比較すると、総じて若干低い得点であった。

2　想起された昔話

柳田[5]は、昔話を、例えば発端の句「とおんと昔」と結末のそれ「いちぽん、さけた」を持つ説話と概念規定した。確かに、媼は、昔話の形式にこれらの句が必要であることを承知はしていた。しかしながら、その想起にはこれらの句を伴わない口頭伝承が多数確認され、この概念規定をそのまま適用することは困難であった。

媼によれば、生家で伝承された昔話には、それらの句が伴っていたが、姉瞽女のそれにはその形式が欠落していたと言う。ところが、ひとたび昔話が想起されると、生家伝承の昔話にもその形式が欠落することは珍しくなかった。これは『瞽女の語る昔話』における指摘と一致する行動であった。[1]従って、本研究においては、柳田の定義ではなく、通常、国文学における昔話の分類基準とされる『日本昔話大成（以下、『大成[6]』と表記）』『日本昔話通観（以下、『通観[7]』と表記）』に依拠して、昔話の概念規定を行った。

1) 昔話伝承目録

面接では、昔話の他に身上話、藝談、瞽女の旅の話、唄や童謡等と話題は広範囲に亘った。これまでのところ、これらを除いた昔話・伝説等の口頭伝承数は38話であった。これらのうち、昔話34話、『大成』『通観』には含まれていない口頭伝承１話、そして伝説３話であった。表１はこれらの口頭伝承38話の目録である。

その結果を岩瀬[1]の研究結果と比較したい。彼は、最後の高田瞽女・杉本　キクエ[註]を対象にして、昔話を想起してもらった。彼女は、５歳の時に視覚障害となり、岩瀬が接近した時は73歳から76歳の間であった。この間、彼女は口頭伝承を83話想起したが、

これらのうち『大成』に含まれている昔話は54話であった。これらの数値を比較すれば、媼から得た昔話数の方が一見少なく見える。しかしながら、その接近は現在も継続中であることを考慮すれば、それらの差異は少なくなると予想される。

2) 昔話の話型

『大成』の分類に従い、昔話を動物昔話、本格昔話及び笑話に大分類した。その結果、媼の想起した昔話の数は順に3話、26話、

表1　口頭伝承の目録

面接年月日	天気	昔話の名称	大分類	下位分類	伝承者	所要時間	『大成』番号	『通観』番号
(1)2001.8.17(金)	晴	1 猿地蔵	本格昔話	隣の爺	加藤　イサ	8'34"	195	1103
(2)9.11(火)	雨	2 花咲爺	本格昔話	隣の爺	加藤　イサ	11'27"	190	364A
		3 勝々山	動物昔話	勝々山	孫爺	9'38"	32C	531
		4 米福粟福	本格昔話	継子譚	加藤　イサ	11'41"	205A	174
		5 佐渡の猫（伝説）						
(3)10.13(土)	曇り	6 猿婿入	本格昔話	婚姻異類婿	不明	11'07"	103	210B
(4)12.13(木)	雨、一時みぞれ	7 子育て幽霊	本格昔話	誕生	加藤　イサ	4'44"	147A	256
		8 蛇女房	本格昔話	婚姻異類女房	加藤　イサ	5'59"	110	224
		9 こんな晩	本格昔話	新話型	林　キン	7'34"	本格新33B	268
		10 ゴゼ淵（伝説）						
		11 猿神退治	本格昔話	愚かな動物	林　キン	4'37"	256	275A
		12 地蔵浄土	本格昔話	隣の爺	孫爺	20'15"	184	81
(5)2002.1.14(月)	晴							
(6)1.24(木)	雪	13 牛方山姥	本格昔話	逃竄譚	加藤　イサ	23'11"	243	352
(7)2.21(木)	晴							
(8)3.7(木)	雪、一時雨	14 蛤女房*1	本格昔話	婚姻異類女房	孫爺	3'37"	112	219
		15 花女房	本格昔話	新話型	加藤　イサ	3'11"	本格新8	232
		16 食わず女房*1	本格昔話	逃竄譚	加藤　イサ	4'28"	244	356A
		17 蛙報恩＋姥皮	本格昔話	婚姻異類婿＋逃竄譚	加藤　イサ	26'09"	104A+209	205E
		18 笠地蔵	本格昔話	大歳の客	加藤　イサ	9'25"	203	42A
		19 猿蟹（柿）合戦	動物昔話	動物競争＋猿蟹合戦	孫爺	6'54"	24+27A	522A
		20 手なし娘*1	本格昔話	継子譚	加藤　イサ	10'12"	208	178
(9)3.29(金)	曇り	21 何が怖い	笑話	誇張譚	孫爺	14'26"	471	661
		22 鮒釣り*2	笑話	愚人譚	孫爺	4'44"	−	985
(10)4.11(木)	晴	23 夫婦の縁	本格昔話	新話型	加藤　イサ	4'05"	本格新30A	148
		24 鶏化け物	−	−	加藤　イサ	3'54"	新話	
		25 法事の使	笑話	愚人譚	孫爺	4'47"	333B	867,868,869
		26 しがま女房*1	笑話	新話型	加藤　イサ	1'38"	笑新5	233
		27 牡丹餅は蛙	本格昔話	運命と至富	加藤　イサ	3'55"	162B	899
		28 三枚の護符	本格昔話	逃竄譚	加藤　イサ	5'09"	240	347
(11)5.2(木)	晴	29 牡丹餅は蛙	本格昔話	運命と至富	加藤　イサ	6'38"	162B	899
		30 肉付面	笑話	愚人譚	水澤　謙一	5'46"	398	62
		31 山姥の仲人	補遺	−	加藤　イサ	38'29"	補30	39
		32 狐の婚礼	本格昔話	人と狐	孫爺	9'12"	273	1003
		33 狢の嫌殺し（伝説）						
		34 狐のお産	本格昔話	人と狐	瞽女宿の人	2'18"	286	−
(12)6.6(木)	晴	35 鳥呑爺*1	本格昔話	隣の爺	不明	2'00"	188	91
		36 山伏狐*1	本格昔話	人と狐	不明	1'57"	275A	1007A
		37 蛇女房	本格昔話	婚姻異類女房	加藤　イサ	16'02"	110	224
		38 鳶不孝*1	動物昔話	小鳥前生	加藤　イサ	0'52"	48	455

註．＊1：断片化した想起を意味する。
　　＊2：『えちご艶笑譚[8]』では、「毛釣り」と記載されている。

５話であった。他方、杉本　キクエのそれは順に８話、25話、21話であった（表２参照）。これらの度数分布に関し、カイ自乗検定を行ったところ、有意差が認められた（$df=2$, $\chi^2=8.01$, $p<0.05$）。この結果は、媼はもっぱら本格昔話の想起を得意とし、他方、杉本　キクエは本格昔話と同程度笑話を想起する事実を意味すると推定された。

表２　媼と杉本　キクエにおける話型分布

話　型 / 伝承者	動物昔話	本格昔話	笑話	合　計
媼	3	26	5	34
杉本　キクエ	8	25	21	54

次に、『大成』の下位分類に従い、動物昔話を動物葛藤・動物分配・動物競走・動物競争・猿蟹合戦・勝々山・古屋の漏・動物社会・小鳥前生・動物由来・新話型の11類型に、本格昔話を異類婚姻婿・異類婚姻女房・婚姻難題婿・誕生・運命と至富・呪宝譚・兄弟譚・隣の爺・大歳の客・継子譚・異郷・動物報恩・逃竄譚・愚かな動物・人と狐・新話型・補遺の17類型に、更に、笑話を愚人譚・誇張譚・巧智譚・狡猾者譚・形式譚・新話型・補遺の７類型に細かく分類して、媼と杉本　キクエの昔話の話型の分布を検討した。

媼が複数の昔話を想起した下位分類を、その話数を括弧書きにして降順に記述すると、隣の爺（４）、逃竄譚（3.5）、異類婚姻女房（３）、人と狐（３）、愚人譚（３）、新話型（本格昔話）（３）、運命と至富（２）、継子譚（２）であった。それらの昔話想起においては85%が本格昔話に属しており、主要な登場人物は人であった。

他方、杉本　キクエのそれは、愚人譚（15.5）、愚かな動物（７）、巧智譚（4.5）、動物報恩（４）、異類婚姻婿（2.5）、小鳥前生（2.5）、継子譚（2.5）、異類婚姻女房（２）であった。それらの昔話想起においては49%が笑話であった。笑話以外では、主要な登場主は動物である昔話が多く、それらは動物昔話として小鳥前生、また本格昔話として愚かな動物、動物報恩、異類婚姻婿と異類婚姻女房であった。

媼も杉本　キクエも１話も想起しなかった下位分類は、動物昔話では動物葛藤・動物分配・動物社会・新話型であり、また本格昔話では婚姻難題婿・呪宝譚・異郷であった。更に、笑話では狡猾者譚・形式譚・新話型・補遺であった。

3）昔話の伝承者

媼に対する昔話伝承経路は大別すると６通り確認された。それらの伝承者と話数を括弧書きにして年代順に記述すると、瞽女になる1920年以前に生家で孫爺（８）、1927年から1945年までの間に姉瞽女の林　キン（２）、1961年から1967年までの間に姉瞽女の加藤　イサ（19）、1975年に水沢　謙一（１）、年代を特定できなかったが瞽女宿の人（１）、年代も伝承者も特定できなかった（３）であった（表３参照）。

その結果を岩瀬[1]の研究結果と比較したい。杉本　キクエの54話のうち、伝承者が特定されているものは32話であり、この伝承経路も大別すると６通りであった。それらの伝承者と話数を括弧書きにして降順に記述すると、瞽女の親方の杉本　カツ（13）、生家の家族（８）瞽女仲間（７）、瞽女宿の人（２）、近所の老婆及び盲目の按摩（各１）であった（表４参照）。これらの結果から、最後の長岡瞽女と高田瞽女への昔話の伝承経路は、いずれも瞽女内部と生家からの合計が全体の約90%を占めている点で符合していた。

主要な伝承者別に媼の昔話想起の話型を検討すると、孫爺からは動物昔話（２）、本格昔話（３）、笑話（３）がほぼ均等に伝承されていた。他方、林　キン及び加藤　イサの二人から伝承された昔話の21話中19話

が本格昔話であった。動物昔話及び笑話は、加藤　イサがそれぞれ1話を伝承しただけであった（表3参照）。

杉本　キクエの話型を主要な伝承者別に検討すると、生家の家族からの伝承においては動物昔話（3）、本格昔話（1）、笑話（4）であった。他方、杉本　カツ及び瞽女仲間からの伝承においては動物昔話（5）、本格昔話（8）、笑話（7）であった（表4参照）。

表3　伝承者別の話型分布（媼）

話　型 伝承者	動物昔話	本格昔話	笑話	合　計
孫爺	2	3	3	8
林　キン	0	2	0	2
加藤　イサ	1	17	1	19
水沢　謙・	0	0	1	1
瞽女宿の人	0	1	0	1
特定できず	0	3	0	3
合　計	3	26	5	34

表4　伝承者別の話型分布（杉本　キクエ）

話　型 伝承者	動物昔話	本格昔話	笑話	合　計
杉本　カツ	3	6	4	13
生家の家族	3	1	4	8
瞽女仲間	2	2	3	7
瞽女宿の人	0	0	2	2
盲目の按摩	0	1	0	1
近所の老婆	0	1	0	1
特定できず	0	14	8	22
合　計	8	25	21	54

最後に、媼自身が昔話の伝承者となった経験を確認した。この点については、媼は「経験したことが全くない。」と繰り返した。この理由として、テレビの普及をあげていた。そのために、「瞽女宿の人から瞽女唄すら求められなくなり、世間話をしていただけであった。」更に、その普及以前にも、「瞽女唄を頼まれることはあっても昔話を話した記憶は全くない。」と語っていた。この点は、杉本　キクエと同様であり、「旅先で昔話を聞き覚えた経験はあるが、昔話をした記憶はない（p29）。1）」という回想と一致していた。

4）昔話想起

(1)昔話想起の所要時間

その時間を1秒単位で測定し、横軸に所要時間、縦軸に昔話数を設定した度数分布を表した（下図参照）。これらの所要時間の代表値はMdn=379, Min=52, Max=2309（sec、以下、単位を省略）であったが、ばらつきは大きかった（SD=479）。

昔話の話型から全体を分類して所要時間を検討した場合、笑話は概して短く（Mdn=287, Min=98, Max=866）、次に動物昔話と続き（Mdn=414, Min=52, Max=578）、本格昔話は一般に最も長い時間を所要した（Mdn=426, Min=117, Max=2309）。

34話のうち、27話は忘却部分のない想起であり、それらの代表値はMdn=454であった（Min=138, Max=2309）。他方、残りの7話は忘却部分の含まれる断片化した昔話であった（Mdn=120, Min=52, Max=612）。しかしながら、それらの昔話であっても、内容は首尾一貫し、その整合性は高かった。

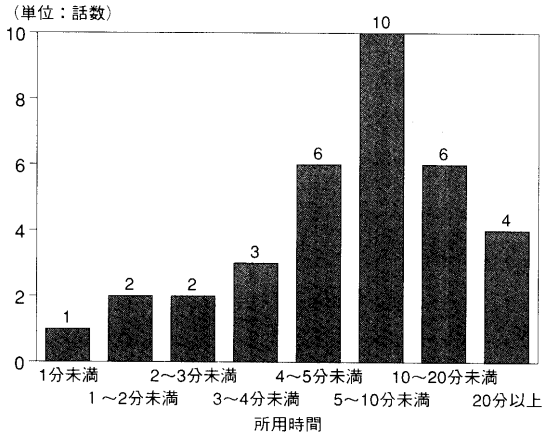

図　昔話想起の所要時間

(2)昔話想起の例：「花女房」

花が化けたってやらの。月見草が、ほら、化けたなんて。あんまり一人の。昔だやら。話だやらの。

あのお、一生懸命、どっか、一人の男が

の。毎日、山へ。まあ、唄歌うて。まあ、唄歌い。まあ、仕事に行ってたんだと（肯く）。ほいたら、月見草って言う花がの。あんまり働いて、いい男気なんだがの。やっぱり化けての（肯く）。嫁になったんだと（肯く）。うーん。そいで、嫁になっての。ほいで、毎日、まあ、働いていたったんだと。

ほいて、ある日の。あのお、とっつあん、男がの。山から戻って来るとしたら。ばか道端にの。たった一本、ほんの綺麗な月見草がの。出ったんだと（肯く）。

ほいで、ほら（右側向く）。父ちゃん、そっげなこと知らないろ。花が化けたなんてこと、分からんすけの。「はーあ。これ、こっげん綺麗のなあ。おらあ、嬶に取ってってくっどうかなあ。」と思うての。そいでぽつんと折しょったと。

ほいて。ほら、そら。花なんだんがあ。へい、嬶、くたーんとしての。ほいで、家にそれ持って来ての。見せようと思うての。「嬶、嬶。」と呼ぶも一向返事もねえしの。「どこ行ったろうなあ。」と思うて。家中探したどもの。いねえし。「どこ行ったろう。」と思ったらの。

井戸端への。行っての（肯く）。へえ、行っての。井戸端へ、しっかりふっついて、ぺちゃんこになっての。へえ、ダメになって。花剪られたっだんが。ダメだった（肯く）。ほいで。「あーっ。お前、なあ。こっげん所いたら。おらあ、どこ行ったかと思って。さっざん探したりしたら。」って言ったら。

「おらあ、本当言えば。おれが、あのお。あんまり、あんた。お前が、あのお、いい唄あてて。毎日毎日毎日毎日、あのお、働いてるんだんがあ。そんに、あのお、迷うて、おれが嬶になったがんでえ（肯く）。おれは、そのお、月見草だ。」って言うて（肯く）。「だども、あんたに剪られたんだんがあ。へえ。ダメだ（肯く）。」へえ。これで終わっちまった。

《綺麗なお話ですね。》

うーん。月見、月見草と言えばの。たった一本の。道の端に出ったんだと。綺麗だんがあ。ほらあ。男は知らねえんだんがの。「あーっ。こっげん綺麗だんがあ。まあ、家持って行って。あのお、嬶に見せようやあ。」って思って。

ぷつんと剪って。ぷつんと取って持ってきた。ほいで、剪られたんだんがあ。ダメだ。まあ、お昼になる頃。そういうことは。あのお、男が花剪ったすけ。井戸端へ下って。月見草が嫁になった（笑い）。

5) 昔話想起の特徴的行動

面接者側からプロンプトしても想起が断片化し、完全には思い出せなかった蛤女房、食わず女房、手なし娘、しがま女房、鳥呑爺、山伏狐、鳶不孝の７話を除くと、昔話の語り口として特徴的な第一は、想起が途切れて話の継穂に苦労する場面が全く認められない点であった。

第二に特徴的な点は、声による感情表現の豊かさであった。具体的に言えば、その調子は登場人物の台詞によって大きく変化した。喜怒哀楽は声によって表現された。テンポは決して早すぎず、しかも遅すぎることもなかった。用いた言葉は強い中越方言であった。あるいは、今日ではほとんど使わなくなった古い言葉も多数含まれていた。

「花女房」には必ずしも認められなかったが、擬態語を用いる時は、例えば「火をそろそろそろそろそろと燃やす。」「明かりがちゃかんちゃかんと見えた。」のように自由自在な反復を伴うことが多かった。それらの音声は規格化・標準化されていると言うよりはむしろ、無秩序だが豊かで生き生きしていた。更に、身振りを用いることはほとんどなかった。自らの想起に納得した

時に、時々肯くこと、会話文の時に左右のいずれかに身体を軽く動かす程度であった。

それらを岩瀬[1]の研究結果と比較すると、媼の語り口の特徴は杉本キクエのそれと大変類似性が高いことが分かる。想起がしっかりしていること、声の抑揚が豊かであること、身振りをほとんど用いないこと等、そっくりであった。相違点と言えば、杉本キクエの語り口はテンポが早いこと、方言が必ずしも強くないこと、更に、擬態語は例えば「どんどん歩く。」「ずんずんずんずん歩く。」のように企画化・標準化されていた点であった。

V　考察

21世紀を迎えた今日、我が国で極めて純度の高い口頭伝承としての昔話を30話以上も想起可能な最後の瞽女と出会えた経験は、大変な驚き、かつ比類ないよろこびであった。しかも、媼は断片化していない27話の想起時間の中央値が7分を超える本格的な語り手であった。

確かに、媼は伝承数の点では杉本　キクエのそれよりも少なかった。しかしながら、媼が所要時間のより長い本格昔話を中心に想起した事実を考慮すれば、杉本　キクエを超える本格的な語り手として位置づけることは可能であろう。

本格昔話の下位分類の中で想起数の最も多かったのは隣の爺であった。これは媼にとって、姉瞽女の藝を真似るだけでは上手くいかなかった経験を表しているのかもしれない。他方、想起数が皆無なのは婚姻難題婿、呪宝譚、異郷であった。婚姻難題婿がない理由は中越瞽女矯風会規約によって、瞽女に結婚が許されていないことと何らかの関係があるであろうし、呪宝譚がないそれは天から降ってくる宝など、おそらく無縁であったからであろう。異郷を想起しない理由も、呪宝譚のそれと大同小異であろう。いずれも媼にとって背負った人生の過酷さを示唆する結果と思われる。

次に、「瞽女は昔話の伝播者である。」という基礎的仮説の成立について考察したい。これは、媼に関しては適用できないようである。媼が伝承された昔話を、旅先で自ら伝承した形跡は全くない。34話の昔話のうち、瞽女宿で聞いたそれは1話だけであった事実も、その傍証となるであろう。この点は杉本　キクエと完全に同様であった。[1]

しかしながら、そのことを以て「瞽女は昔話の伝播者とは言えない。」と即座に一般化することも、またできない。媼が瞽女を引退した年は1976年であり、杉本　キクエのそれは1964年であった。これらの事実を考慮すれば、本研究の結果から瞽女文化の最後の時代において、瞽女の来訪者伝承機能がほとんど失われていた高い可能性を指摘はできるであろう。

最後の二人の瞽女が、瞽女宿で囲炉裏を囲んでの昔話伝承機能を持たなかった事実の意義を考察したい。これは、彼女達が昔話を伝承しなかったことを意味しない。その理由は、媼の場合も、杉本　キクエの場合も、一緒に旅にでた瞽女仲間から昔話を確実に伝承されていたからである。すなわち、瞽女は、外に向けての伝承機能を著しく弱めてしまっていたが、他方、その内においては細々と、しかしながら、確実に、伝承を続けていたのであった。

昔話の内容は、本研究で検討した花女房を例にとると、月見草が働き者の男にとって積極的な癒しを援助する重要な役割として機能していた。これは、植物が人間と等価の生命を持った存在として、登場人物に生き生きと語りかけるアニミズムの世界であった。そして、この世界観は花女房に限定されることではなく、それ以外の昔話においても頻繁に認められた。その意味するところは、世界の基礎的なあり方が知覚と

は独立別箇なものであるという、二元論的な下絵とは大きく相違したそれ[9]であり、これは媼の伝承した固有世界と言えるであろう。

最後に、身体的行為としての媼の語り口を考察したい。断片化した昔話を除くと、何よりも想起は驚くほどしっかりしていた。曖昧なそれはほとんど認められなかった。ただし、これは、昔話以外の身上話、藝談、瞽女の旅の話、唄や童謡等の想起においても同様な特徴であった。

昔話想起の最中に身振りはほとんど認められなかった。これは瞽女としての藝には身振りが禁忌であった約束事の反映なのかもしれない。これとは対照的に、声による感情表現の豊かさと無秩序だが自由で、生き生きした擬態語の使用は大きな特徴であった。媼が背負った人生の過酷さにもかかわらず、それは常にのびのびして、豊かで生命力があふれており、口頭伝承における優れて身体的行為であった。

文献

1）岩瀬　博：『瞽女の語る昔話：杉本　キクエ媼昔話集』（昔話研究資料叢書別巻）．三弥井書店．1975.

2）岩瀬　博：昔話の語り手としての瞽女．昔話－研究と資料，9，19-35，1980.

3）河合　隼雄：事例研究の意義．臨床心理学．1，4-9，2001.

4）中村　雄二郎：『臨床の知とは何か』．岩波書店．1992.

5）柳田　國男：『昔話覚書』．三省堂．1943.

6）関　敬吾：『日本昔話大成』（資料編全11巻）．角川書店．1978-1980.

7）稲田　浩二・小澤　俊夫：『日本昔話通観』（資料編全29巻）．同朋社．1977-1990.

8）水沢　謙一：『えちご艶笑譚』．高志書院．1998.

9）藤澤　令夫：ギリシャ哲学と現代．『藤澤　令夫著作集』．Ⅴ．1-151，2001.

註

瞽女の生き方を少しでも知ると、彼女達に敬称をつけずに呼ぶことには大きな後ろめたさを感じる。しかしながら、本研究においては、主に表現の煩瑣を避ける理由から、故人については実名で、更に、通例に従い敬称をつけずに表記した。

謝辞

媼のプライバシー保護に鑑み、ご芳名をあげることはできないが、筆者らの面接と執筆の許可等、本研究のあらゆる面でご協力くださった媼御本人、Ｉ先生、Ｍ先生及び関係者各位の方々に心から感謝いたします。